
 学 会 記 事

第 226 回新潟外科集談会

日 時 昭和63年 5月14日 (土)
午後 1時
会 場 有壬記念館

一 般 演 題

1) 胃潰瘍穿孔時に発見された Bochdaleck hernia の 1 治験例

吉田 正弘・小山 真 (県立吉田病院外科)
吉岡 一典・阿部 僚一 (同 内科)
長沼 佑幸 (同 内科)

成人の Bochdaleck 孔ヘルニアは、比較的稀な疾患とされているが、最近、胃潰瘍穿孔時に発見された 1 例を経験したので報告する。

症例は49才男性で胸部外傷の既往はない。8年前から当院内科でアルコール性肝障害、胃十二指腸潰瘍にて加療中、腹部の激痛、胸内苦悶が出現し当科に紹介された。胸部 x-p にて左肺野に鏡面像と腸管ガス像を認め、さらに右横隔膜下に遊離ガス像を認めた。穿孔性腹膜炎および横隔膜ヘルニアと診断し、同日緊急手術を施行した。

手術所見；胃潰瘍穿孔および左横隔膜外側方に10×6cmの欠損部を認め、これを通して脾および結腸が胸腔内に脱出していた。ヘルニア嚢は認められなかった。広範囲胃切除術を行い、横隔膜欠損部は一層に縫合閉鎖した。

術後経過は良好であった。

2) 当科における外傷性十二指腸破裂症例の検討

三科 武・鈴木 伸男 (鶴岡市立荘内病院)
齊藤 博・石原 良 (外科)
乾 清重・内藤万砂文 (外科)
石川 裕之

外傷性十二指腸破裂は腹部鈍損傷の中でも頻度は少ないと報告されている。昭和55年より昭和63年3月まで当科において手術が施行された外傷性十二指腸破裂症例は4例あり、年齢は40才から61才、男性3例、女性1例であった。受傷機転としては交通事故(ハンドル外傷)が3例、労働災害が1例である。受傷より手術開始までの時間は平均7時間45分であった。損傷部位は第1部1

例、第2部1例、第3部2例であった。他臓器との合併損傷がみられたのは1例で結腸損傷の合併がみられた。全例において肉眼的には膵損傷は認められなかった。1例は完全断裂で3例は部分断裂であり、全例デブリードマン、縫合を施行した。術後、3例に膵炎を合併したが全例軽快退院した。外傷性十二指腸破裂は遊離腹腔内に消化液が流出すると激しい腹膜炎症状を呈するが後腹膜腔への穿孔のみでは症状ははっきりしないことが多い。診断には臨床症状の他、CT 検査が有効と考えられた。

3) 悪性腫瘍を疑ったエルシニア腸炎の 1 例

大坂 道敏・大矢 明 (亀田第一病院外科)
津野 吉裕 (新潟大学第一外科)
若林 泰文 (同 第一病棟)

エルシニア腸炎は *Yersinia enterocolica* 菌による急性腸炎で、最近報告例が増加してきているようです。私達は、肉眼的に悪性腫瘍と判断されたエルシニア腸炎を経験したので報告します。

症例は、38才の男性で、発熱と右下腹部痛にて来院。右下腹部に圧痛と抵抗を触れ、急性虫垂炎を疑い、同日手術を施行。開腹所見で、回盲部が腫大し、腫瘍状であり、リンパ節の腫瘍も著明であった。このため、回盲腫瘍(悪性リンパ腫)を疑い、全麻に切換えて回盲部切除を行なった。病理検査では、腫瘍の所見無く、エルシニア腸炎疑い、抗体価を測定したところ陽性であった。術後経過は順調で、抗体価も陰性化した。

4) 多発性潰瘍性小腸悪性リンパ腫の 1 例

坂下 澁・武藤 経一 (県立新発田病院)
北條 俊也・姉崎 静記 (外科)
村上 博史・小山 善基

症例. 77才. 男性. 昭和62年9月28日より、下腹部痛出現し、某医の対症療法で改善せず、10月1日当院内科受診、腹部 CT、注腸造影で異常なく、外来通院治療で一時症状消失したが、11月9日より下腹部痛再度出現し、11月10日内科入院、小腸造影、大腸内視鏡検査で、Bauhin 弁より口側 13cm 内に2個潰瘍あり、生検組織診断で非特異性単純性潰瘍であった。12月25日、回腸盲腸切除術施行、終末回腸より 1.34m 内に直径6~0.5cm の潰瘍14個散在し、その中1個は穿孔し腹膜に癒着していた。切除標本の組織診断は小細胞型非ホジキン悪性リンパ腫であった。本症例は小腸悪性リンパ腫の中でも稀であり、当院の小腸悪性腫瘍例を含めて、若干の文献考察を加えて報告する。